

# 英語発音指導と国際共通語としての英語

荻原 洋

English Pronunciation Teaching and English as a Lingua Franca

Hiroshi OGIHARA

E-mail : ogihara@edu.u-toyama.ac.jp

キーワード：発音指導，国際語としての英語，リスニング

keywords : pronunciation teaching, English as a Lingua Franca, listening

## 1. はじめに

日本における外国語（英語）教育で最も重視されているのが「外国語によるコミュニケーション能力（の育成）」である。この目標自体に異論を唱える人はほとんどいないと思われるが，そこに至る方法論については，実際のところそれほど十分に議論・検証されているわけではない。いわゆる「走りながら考える」といった様相を呈しているわけであるが，それを最も良く表しているのが小学校への英語の正式導入であろう。コミュニケーション重視の中学校英語がそれほどうまく機能せず，その原因について十分な議論が行われないうまま，学習開始時期の低年齢化というカードを切ってしまったのだが，小学校英語と中学校英語の接続については「やりながら考えましょう」という感が強い。

そのような検証が不十分なままの外国語教育の進行を助長しているのが「通じれば良い」というワールドカードである。この基準は一見もっともらしく思われるが，日本の英語教育においては，通じる相手が同じ日本人同士であったり，あるいは日本人英語に慣れた native speaker (ALT など) であったりということがほとんどである。またこのような事態が改善されない理由として，「通じれば良い ⇒ 米英の発音でなくても良い ⇒ 日本人発音で良い」という，非常に短絡的・感傷的なご都合主義もかなり浸透している。

しかし，日本人同士でしか通じない日本人英語というものを直視してもなお，「通じれば良い」とためらわずに言える教師が果たして実際どれだけいるだろうか。本当に通じる英語を学ばせてあげたいが

とてもそこまでは手が回らないから，とりあえず（教室内とはいえ）互いに英語で通じる感覚だけでも体験させてあげよう，といった，悔しい思いを持って日々授業をしている英語教師も多いだろう。小学校にまで英語の学習が広がり，時間的にもまた気持ちの上でも外国語学習に対するゆとりが生じた今こそ，日本の英語教育においてどのような「通じる英語」を目指すべきなのかという，腰を落着けた議論が必要なのだと思う。

本小論では，Walker (2010) で紹介されている「国際共通語としての英語 (English as a Lingua Franca)」の特徴を参考にしながら，発音指導においてどのようなことを考えていくべきなのか，著者が行った発音指導とリスニングに関する実験を元に考察してみたい。

## 2. 国際共通語としての英語

Walker (2010) は，世界中で英語がどのように使われているかを，次のように大きく3つのグループに分けて考えている。

Inner Circle：英語を母語とする国々（人々）。アメリカ，イギリス，カナダ，オーストラリアなど。話者数はほぼ固定しており，増加はほとんど見られない。

Outer Circle：英語を第二言語とする国々（人々）。インド，シンガポール，マレーシア，ケニア，タンザニア，ナイジェリアなど。旧イギリス植民地が多く，英語は支配者の言語から独立の手段（公用語）へと役割を変える。また，それぞれの国で

独自の発展を遂げることが多く、それらはNew Englishes と呼ばれる。これらの国々では人口が増え続けているので、英語の話者も必然的に増えている。

Expanding Circle：英語が第二言語でも公用語でもない国々（人々）。中国，ロシア，日本など。これらの国々の英語話者数は急激に伸びている。

また、Walker は Crystal (2003) の推定を引用して、Inner Circle (IC) の話者はおよそ 4 億人、Outer Circle (OC) が 4 億3000万人、Expanding Circle (EC) が 7 億5000万人、と書いている。ちなみに、Crystal の話者数の推定は、competent user を“(having) a medium level of conversational competence in handling domestic subject matter” と考えた上でのものであり、日本人のどのぐらいがこれに当てはまるのかを独自に考えてみるのも面白いであろう。

このグルーピングは、国際共通語としての英語のあるべき姿を考える上で、非常に重要な意味を持っている。というのも、IC 内の英語話者がほとんど増えないのに対し、OC や EC 内の英語話者 (Crystal の言う competent user) はますます増えて行っており、その OC や EC に住む人々がお互いに意思の疎通を図るための唯一の言語が、今や英語であるからである。このような現実を踏まえ、Walker は、これまでの英語は「OC や EC に住む人々が、英語を母語とする人々 (natives) と話をするために学ぶ言語」であったが、これからは「OC や EC に住む人々が、他の OC や EC に住む人々と話をするために必要な言語」になると言う。そしてこの後者を「英語の新しい役割」と呼んでいる。

さらに、Walker は、この新しい役割を果たしつつある多様な英語をつぶさに観察し、それらに共通する特徴を拾い出している。例えば、文法に関しては、一致の欠如 (she like), 緩い呼応 (things who/people which), 冠詞の欠如 (he is very good person), 不可算名詞の可算化 (informations), 指示表現の汎用化 (this countries), コロケーションの拡充 (make a discussion) などを挙げ、将来的にはこれらも「国際共通語としての英語においては文法的」とみなすことが望ましいとしている。また、音声に関しては、OC や EC で新しい役割を果たしている英語には、標準英語が持つ「子音の区別」

「子音連続」「母音の長さの区別」「文ストレス」があるという。

では、日本人の英語はこれらの特徴を有しているだろうか。有していれば少なくとも OC や EC で「通じる」英語と言えるのだろう。(ちなみに、Walker は、non-native 同士が英語を使って話している時、その場には mutual understanding, cooperation, tolerance が見られるのに、そこに native が入ってくると、それらが損なわれることがある、と言い、native 側からの（言語規準に対する）歩み寄りを期待している。そして、その歩み寄りを期待した上で、上記の特徴を持ち OC や EC で共通語として機能しているような種類の英語を English as a Lingua Franca (ELF) として規定しようとしているのである。)

まず文法について見ると、先に挙げた例を見る限り、これらは日本人の英語には普通に見られる現象である。しかし、これをして「文法的には ELF の基準を満たしている」とは言いにくい。むしろ、日本国内で行われる様々な種類のテスト等において、どこまでを許容範囲 (native の文法から見れば間違っているが ELF 的には問題のない範囲) として認めるかの基準作りが重要となるであろう。native の文法から外れたものを奨励する必要はないが、許容範囲内のものをしつこく矯正して結果的にコミュニケーション力が落ちる、というようなことがないように気を付けることの方が、はるかに価値があるからである。

次に音声面であるが、こちらに関しては、日本人の英語は ELF の条件を満たしているとはとても言えないであろう。例えば、高井 (2010) は、日本に在住する 10 人の native speaker に「日本人の英語の発音についてどう思いますか」をインタビュー形式で訊ね、得られた回答の中の目立ったものとして以下のようなものを紹介している。

- ア. 単語がひとつひとつ独立して発音されている。
- イ. 子音だけの発音ができない。(単語の途中や終わりに母音が入る。)
- ウ. 日本語にない音 (f, v, th などの音) が発音できない。
- エ. リズムやイントネーションが不適切である。(あるいは、全く無い。)

このような特徴を示しながら「英語の学習において発音はほとんど教育されていない。日本人の英語に慣れた人なら聞き取れるが、慣れていない人は聞き取れないだろう」と言っている native もいたそうである。これらを、先に述べた ELF の音声的特徴である（標準英語が持つ）「子音の区別」「子音連続」「母音の長さの区別」「文ストレス」に照らし合わせてみると、アとエは「文ストレス」の欠如と関係があり、イは「子音連続」の欠如を、ウは「子音の区別」の欠如を、それぞれ示している<sup>1</sup>。

以上のことから、日本人の英語が OC や EC で通用する ELF の仲間入りをするためには、少なくとも音声面でいくつかの改善が必要になることが明らかである。現状のままの、日本人同士あるいは日本人の英語に慣れた native との間でだけ通じる英語をして「通じれば良い」というのは、あまりに無責任な姿勢であろう。では、どのように改善プランを立てれば良いであろうか。次節では荻原 (2011) で展開された議論を紹介しつつ、新たにデータを付け加えて、この問題について論じてみたいと思う。

### 3. 発音訓練とリスニング力の変化

荻原 (2011) では、高井 (2010) の調査を元に、どのような発音訓練がリスニング力のさらなる向上に結びつくかを調べる実験が行われた。本論文は、その後に行われた同様の実験の結果を紹介し、両者を合わせた上で、再度検討を加えようとするものである。

そこで、まず最初に高井 (2010) の調査を紹介し、その次に荻原 (2011) の実験について概要を述べておきたい。

高井 (2010) は、典型的な日本人英語と思われるものを録音し、さらにそれに英語の音声的特徴を 1 種類だけ加えた（その点だけ改善した）ものをいくつか用意し、先ほどのインタビューに答えてもらった 10 人の native speaker に聞いてもらい、どれが一番聞きやすいかを判断してもらうということをしている。実際どのような発音を native に判定してもらうかを定める際には、筆者も検討に参加し、以下の 5 種類が選ばれた。

1. 一般的な日本人英語（前節で native の印象として紹介されたア～エの全てを含むもの）

2. 上記 1 をより速いスピードで読んだもの（ただし抑揚は平坦）
3. 単語の連結（リンキング）を意識して読んだもの（アを改善したもの）
4. 子音の一種である摩擦音 [f] を意識して読んだもの（ウを改善したもの）
5. 英語の強弱のリズムを意識して読んだもの（エを改善したもの）

イを改善したものが入っていないが、子音連続は個々の子音をきちんと発音すると自然に出来てくる部分があるので、4 との区別が難しくなるだろうと考えた<sup>2</sup>。また、エの一部であるイントネーションは感情の表れに連動する部分が大きいため、このような調査には不向きであろうと判断した。2 を加えたのには理由がある。というのは、日本の中学校や高等学校では英語の学習に音読が盛んに取り入れられているが、それを回数やスピードで評価することが多いため、どうしても口の動きが小さい抑揚のない読み方が習慣化されてしまうという現状があるからである。「こういう読み方を native がどう思っているのかを知りたい」というのが 2 を加えた理由である。

果たして native の評価は、高い順に「4>3・5>1・2」であった。（調査方法の詳細については荻原 (2011) を参照。）3 と 5 はほぼ同じ評価、1 と 2 もほとんど同じ評価である。ここから分かることは、1 つには、子音をはっきり発音しているものを一番高く評価しているということである。今回は [f] の音だけであったが、荻原 (2006) では 1 つの子音をきちんと発音することが発音全体にいかにも良い影響を与えるかが示されており、同様の効果が現れたと思われる。もう 1 つは、1 と 2 がほとんど同じ評価を受けていることから、いくら読むスピードを速くしても、native は日本人英語を聞きやすくなったとは感じないということである<sup>3</sup>。

この結果を受け、荻原 (2011) では、「摩擦音をしっかり発音する練習をしたグループの方が、単に速く読むことをしていたグループよりリスニング力が伸びる」という仮説を立てて検証を行った。この背景には「native が好ましいと感じる発音ができるようになると、native の発音が聞き取りやすくなるのではないか」という予想と、英語学習の時間的制約の中でより効率的な学習法を見出す必要があ

るという問題意識がある<sup>4</sup>。

この検証作業は、大学1年生の2クラス（合わせて約90人）に1ヶ月半（6回の授業）の間、異なる発音練習を課しリスニング力に差がでるかどうかを調べるといったものであったが、結果としては、単音（摩擦音）の発音に注意して練習したグループの方が、ただ速さを求めて音読したグループよりリスニングの力がかなり伸びる可能性がある、という示唆が得られている<sup>5</sup>。従って、nativeの「4>3・5>1・2」という評価のうち、「4>2」に関しては、リスニング力の伸びという指標で見ると、耳を傾けるべき有益な助言になり得るものと考えて良いように思われる。では、3と5についてはどうだろうか。それを調べたのが今回の実験である。

## 4. 実験

### 4.1. 仮説

今回の実験は、前節の3と5に対応する実験群を追加するためのもので、やり方等は荻原(2011)のそれと全く同じである。結果の予測としては「単語を連結させて読む練習をしたグループや、英語のリズムで読む練習をしたグループの方が、単に速く読むことをしていたグループよりリスニング力が伸びる」ということになる。

### 4.2. 方法

同じ英文を大学1年生の2つのクラスで別々の条件で音読練習させ、リスニングの成績に違いが出るかどうかを調べてみた。条件の違いは以下の通りである。（「リズム読」は「リズム読み」を短くしたものである。）

- 単語連結クラス：文章中のnで終わる単語の次に母音で始まる単語がきたら、nとその母音とを連結させて読む。
- リズム読クラス：英語の強弱のリズムを付けて文章を読む。

課題英文は大学教養英語用教科書『速読の基礎演習』（成美堂）に載っているものを簡略化したもので、以下はその一部である（全体で160語ほど）。

In 1174, the people of Pisa wanted a bell tower

because the church did not have one. They wanted the tower to be the most beautiful one in all of Italy. But as soon as the first floor .....

単語連結クラスでは、In 1174を「イニレヴン・・・」、one in allを「ワニノール」と読むように、リズム読クラスでは、例えば they WANTED the TOWER to be the MOST BEAUTIFUL ONE in ALL of ITALYのように「大文字となっている単語のアクセントのある音節が一定の間隔で出てくるように」読むよう指示し練習させた。またある程度条件通りに読めるようになったかどうか、一人一人チェックした。チェックは2段階で行い、1回目は条件が満たされているかどうか、2回目は条件が満たされさらに全体が滑らかに読めるかどうかを見た。このようにして1ヶ月半の間それぞれの条件で音読の練習を続け、それがリスニング力にどう結びつくかを次の2つの方法で測った。（問題は全てTOEIC形式であり、両方とも荻原(2011)で使ったものと同じである。）

- 練習期間の前後に行うリスニング問題の成績（テキスト外の問題）
- 1ヶ月半の練習期間中に授業で行うリスニング問題の成績（授業テキストの問題）

### 4.3. 結果

音読練習を始める前と後で行ったリスニング問題の平均点（20点満点中）は次の通りであった。なお、単語連結クラスは理系、リズム読クラスは文系である。（カッコ内はSD）

【表1】音読練習前後のリスニング力の変化

	音読前	音読後
単語連結クラス (n=39) :	11.3 (2.3)	12.0 (2.9)
リズム読クラス (n=40) :	12.6 (2.7)	13.0 (2.6)

音読前のリスニング得点には有意差があったので（ $p=0.025$ ）、音読後のクラス間の比較はせずに、クラス毎の伸び率だけを見ると、単語連結クラス（前節の3に対応）の伸び率は約6%、リズム読クラス（前節の5に対応）の伸び率は約3%である。荻原(2011)で全く同じ手順で音読練習をした時の速度クラス（前節の2に対応）の伸び

率が2%、単音クラス（前節の4に対応）が10%であったので、伸び率の大きい順に並べると「4>3>5>2」となり、ほぼ native による「聞きやすさ」の評価と一致する。比較の対象となるクラスが実験用に作ったクラスではないため、最初からリスニング力に差があったということを考慮しても、非常に興味深い結果が得られたと言って良いだろう。

さらに、音読練習期間中に行った授業テキストのリスニング問題の平均点（同じく20点満点中）の推移を示したのが表2である。

こちらでも1回目で明らかに差があるので、クラス間の比較を行わず、1回目を1とした時の2回目以降の値を計算し、さらに、参考として荻原(2011)の単音クラスと速度クラスのデータを加えて示してみたのが表3とそれに続くグラフである。

いずれもリスニング力を伸ばすことを目的とした授業なので、徐々にアップしていくのは当然として、問題は「伸び方」である。このまま音読練習を続けた場合、どのようにリスニング力は伸びて行くと予測されるだろうか。このグラフが示すのは短期間の傾向であり、また、単語の連結やリズム読みの練習

が比較的早い段階で伸びをもたらしているのに対し、単音の練習は後になってから効果が大きく出ていることなどについても、今のところ納得できる理由を見出すことはできない。しかしここでもまた、最後の測定の段階で（仮に一時的であったとしても）、音読の前後で行ったリスニングの成績の伸び率と同じ順位「4>3>5>2」が成立しているということは、何らかの方向性を感じ取るには十分な結果と言えるのではないだろうか。

#### 4.4. 考察

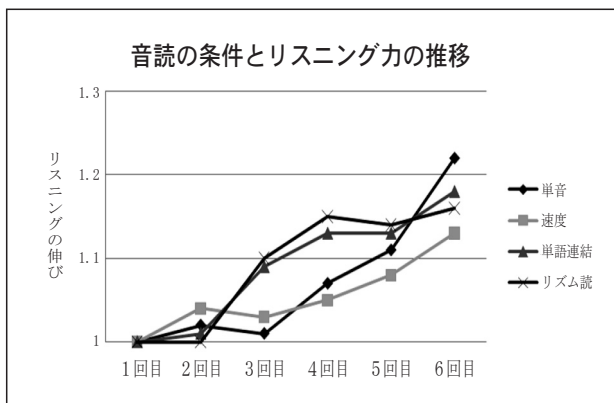
前節まで、日本人の英語に典型的に見られる発音の癖を部分的に改善したものを何パターンか native speaker に聞いてもらい、どの改善が最も効果的か（native の評価が高いか）を調べた結果を元に、それらがリスニング力の向上にどう結びつくかを検討してきた。既に述べたように、この背景には、「発音できる音は聞き取れる」という考えと、「英語の学習時間が制約されている中で、少しでも効果的な学習法を見つけ出したい」という願いの2つがある。

【表2】音読練習期間中のリスニング力の推移

	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目
単語連結クラス (n=39) :	12.5	12.6	13.6	14.1	14.1	14.8
リズム読クラス (n=40) :	13.6	13.6	15.0	15.6	15.5	15.8

【表3】音読練習期間中のリスニング力の推移（比率表示）

	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目
単語連結クラス (n=39) :	1.00	1.01	1.09	1.13	1.13	1.18
リズム読クラス (n=40) :	1.00	1.00	1.10	1.15	1.14	1.16
単音クラス (n=50) :	1.00	1.02	1.01	1.07	1.11	1.22
速度クラス (n=42) :	1.00	1.04	1.03	1.05	1.08	1.13



結果として、発音の矯正ポイントを絞って音読練習を行い、その成果としてリスニング力の伸びを見たところ、それはほぼ native の好み（評価）と一致していた。つまり、native が「好ましい発音」と判断した順番通りに、そのような発音矯正をしたグループのリスニング力の伸びが観察されたのである。

とはいえ、今回の実験は、既存のクラスを対象としているためどうしてもクラス間で学生の英語力にバラつきが生じ、十分にコントロールされた実験環

境の中で行われたものとは言い難い。そのため、統計処理の多くが記述的なものとどまり、実証的と言うよりむしろ課題探索的な性格が強くなっていることは否定できない。しかしながら、外国語教育という、対人コミュニケーションを基本とする研究領域にあっては、実験室的な研究デザインはかえって不自然であり、本研究のように課題を探求し、考証の方向性を常に確認しながらコツコツとデータを収集し確信を深めていく、というような手法がより好ましいと思われる。その意味で、先に述べた結果は、確率統計的にサポートを得たものではないが、これからの外国語教育のあり方に対して、1つの有益な示唆を与えてくれるものと言えよう<sup>6</sup>。

## 5. おわりに

外国語としての英語を駆使してコミュニケーションを図る機会がますます多くなってきている今日、「どんな英語でも通じれば良いのだ」という言い方にはそれなりの理由があると思う。しかし、あるnativeが「日本人英語に慣れた人なら聞き取れるが、慣れていない人は聞き取れないだろう」と言ったように、この錦の御旗には「日本人同士あるいは日本人の英語に慣れた外国人（特にALT）との間で通じる」という使用制限が巧妙に縫い付けられている。

確かにInner Circleの住人たちが話す英語を身につける必要はないかもしれない。しかし、Walkerが言っているように、今日ではOuter CircleやExpanding Circleの住人同士が英語で意思疎通を図る場面の方が、彼らがInner Circleの住人と話をする場面より多いというのであれば、「どんな英語でも通じれば良い」という反証不可能なテーゼは取り下げ、「Outer CircleやExpanding Circleで通じるEnglish as a Lingua Francaの習得を目指す」という、誰の目にもその具体像が明らかな目標を掲げるべきではないだろうか。

そうであれば、本研究は次の2点において、このような望ましい方向性をサポートしていると言える。その1つ目は、「OCやECで通じるELFの習得」という目標に到達するための具体的な手段・手順の一部を示しているということである。というのも、native speakerたちが指摘した「日本人の英語に欠けている音声的特徴」の全てが（Walker

の言う）ELFに必要なものであることが分かっても、「ではそれらの習得を目指しましょう」と言うだけでは何も起こらないからである。「ELFの何をどうやって」という具体的計画が論拠に基づいて提示されて初めて、目標は実現可能になる。本研究では、日本人の英語発音の改善ポイントに関してnative speakerが示した判断（どの点を改善すればより好ましい発音になるか）に基づいて発音練習を行えば、より効果的にリスニング力のアップを図ることができる可能性が示されている。ということは、英語学習の時間的制約を考えると、native speakerがより高く評価する改善点（子音の発音）をまず最初に持ってきて重点的に習得（改善）を目指し、後は評価の高い順に次のステップとして位置付けていけば良いことになる。

2つ目のサポートは、教える側の勝手な思い込みを明らかにしているという点である。例えば、先に紹介した高井（2010）の調査によれば、native speakerは日本人が英語を速く読んでも、それが日本語的な発音であればほとんど評価しないのに対し、日本人英語教師は速い読み方をかなり高く評価する傾向がある。しかし、本研究の結果では、速く読む（発音する）ことは必ずしも効果的なリスニング力のアップには繋がっていない。つまり、nativeも評価しないしリスニング力のアップにも繋がらない発音の仕方を、英語教師は「良い」と信じているのである。そして、ただそれだけならまだ良いのだが、このような信念は往々にして別の（望ましい）目標やその達成手段への障害となるのである。というのも、日本人の発声器官には英語音を生成するための筋力がないので、速く読もうとするとどうしても日本語の発音になってしまうからである。教師が「速い読み（発音）」を重視すればするほど、nativeが一番高く評価し、リスニング力のアップに一番貢献する「単音（子音）の発音」への重要性の認識が薄れていく。このような問題が存在するという事実を本研究は我々に気づかせてくれているのである。

始めに述べたように、英語教師であれば誰でも「通じる英語」を生徒に学ばせてあげたいと思っているはずである。しかし現実には、それがどういう英語で、どうすればそこに辿りつけるか、必ずしも明確に示されているわけではない。高く掲げられた理念に実行可能なプランという梯子を架けることが、言語教育研究に携わる者の大きな責任なのである。

## 注

1. 「母音の長さの区別」については、今回は特に取り上げていないが、日本人にとっては非常に難しいものの1つである。特に、長母音の一種である「二重母音 (diphthong)」は、日本語のアクセントが平坦 (flat) であることが影響して、いくら練習してもなかなか二重母音の発音にならないという悩みがある。メール (mail), セール (sale), ボート (boat), コート (coat) のように、カタカナ語にしたときに全て平坦になってしまっていることも、習得をますます困難にしている要因であろう。英語の骨格は子音であるが (O'Connor, 1967), 母音についてもどの程度を習得の目標にしたら良いのかという議論が別途必要である。(二重母音が発音できていないと、だらしのない発音 (=だらしのない人間) と思われるってしまう場合も、無いとは言えないのである。)
2. 本来英語のリズムは個々の音の発音の連続の上に成り立っており (南, 1984), 個々の音の発音とリズムは相互に独立したものではないため、これらの要素を別々に (あるいは順番に) 練習することには無理がある。ただ、英語学習に使える時間が極めて限られている現状の中で、少しでも効率的な学習をデザインする (優先的に学習すべき項目を探し出す) ためには、要素を分けて練習してみるようなことも意味のあることではないかと考える。
3. この調査では native の好みをより分かりやすく知るため、対照群として日本人大学生と日本人英語教師にも同じ調査をしている。それによると、日本人大学生は、日本人英語やその速いバージョンを聞きやすくと、単語が連結され形が分かりにくくなったものを聞きにくいと感じている。また日本人英語教師は、全体的に native と同じ判断の傾向を示しているが、1点だけ、速い読み方を高めに評価しているという違いがある。ただ、native・日本人大学生・日本人英語教師の全てのグループが、摩擦音をしっかり発音した読み方を一番聞きやすくと感じていることは興味深い。
4. 先に述べたように、日本の学校で音読が取り入れられる時は「速さ」が求められるので、この仮説の中の「単に速く読むことをしていたグループ」は、普段の授業とほぼ同じことをしているという意味では、統制群と言って良いのかもしれない。

5. 通常の授業の中で行われたものであり、最初からクラス間にリスニング力の差があったため、両クラスのリスニング力の比較ではなく、クラス毎の伸び率の比較になっている。
6. このように実際の授業を用いた検証作業では、対象となった学生達がこの授業以外のところで英語力 (今回はリスニング力) を伸ばした可能性はないのか、というような検討が必要になる。今回の学生たちは1年生で、週に一般教養の英語の授業が2コマあり、筆者ともう1人の教員が担当している。確認したところ、そのもう1つは native による会話中心の授業であったので、今回行った音読やリスニングに影響を与えた可能性は低いと考えられる。

## 引用文献

- Crystal, D. (2003) *English as a Global Language* (2nd ed.). Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- 南 比佐夫 (1984) 「「会話のしくみ」に見る日米の差」河野守夫, 沢村文雄 (編著) 『Listening & Speaking—新しい考え方—』136-145頁 京都: 山口書店
- O'Connor, D. (1967) *Better English Pronunciation*. London: Cambridge Univ. Press.
- 荻原 洋 (2006) 「英語発音指導の要点とその波及効果について」, 中部地区英語教育学会紀要, 第36号, 121-128頁
- 荻原 洋 (2011) 「リスニングと発音指導—ネイティブの「助言」は何か—」, 中部地区英語教育学会紀要, 第40号, 25-32頁
- 高井伸太郎 (2010) 『日本語英語が国際語としての英語になるためには』, 富山大学人間発達科学部学士論文 (未刊)
- Walker, R. (2010) *Teaching the Pronunciation of English as a Lingua Franca*. New York: Oxford Univ. Press.

(2011年10月20日受付)

(2011年12月14日受理)

